

1. 「ケース教材を使用してジェネリックスキルを育成するー中級学習者を対象としてー」

山口恵子(桜美林大学)・鈴木秀明(目白大学)・中嶋めぐみ(目白大学)

社会的ニーズの変化に伴い、日本語母語話者に加え、日本語学習者に対するジェネリックスキルの育成が求められている。しかし、課題発見力、課題解決力、コミュニケーション力等の本質的能力を育成する指導は、日本語教育の場では十分に行われていない。本発表では、ケース教材を使用して、中級学習者を対象に行った授業実践を通して、学習者のジェネリックスキルがいかに向上したかを、学習者評価および教師評価をもとに報告する。

2. 「教師の評価コメントの分析に基づいたルーブリック作成の取り組み」

安高紀子(聖心女子大学)・品川なぎさ(聖心女子大学)・小川早百合(聖心女子大学)

本発表では、聖心女子大学の短期留学生日本語クラスでのパフォーマンス評価のためのルーブリック作成の取り組みについて報告する。これまでの評価は、総合的尺度によって評価が行われ、何をどう評価するかは個々の教師に委ねられていた。そこで、各教師が授業報告に記述した評価のコメントを分析し、評価項目の再検討を行い、ルーブリックを作成した。それをを用いて、担当教員で発表の評価を行い、教員間で評価基準の共有を試みた。

3. 「日本語学習者と日本語母語話者のカタカナ意識の相違点ーカタカナ教育の今後の課題ー」

磯太恵子(山野美容芸術短期大学)

これまで日本語教育機関におけるカタカナ教育の研究は学習者の意識や困難点から論じられてきた。カタカナに関して学習者と日本語母語話者にアンケートを実施しカタカナ意識の相違点を考察した。日本語母語話者は使用に肯定的であるが、学習者は困難度が上昇している。本発表では分析した結果を報告し、今後のカタカナの授業設計を検討する。

4. 「留学生の日本語クラスにおけるシナリオ・ライティングの取り組み」

小笠恵美子(東海大学)

初中級から、中級レベルの留学生を対象として行ったシナリオ・ライティングの実践を報告する。本実践は、2012年第29回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会におけるシナリオ・ライティングのワークショップを契機として開始し、日本語学習者によるシナリオ・ライティングの機会を設けてきた。本発表では、学習者が言語能力の制限を超えて、シナリオを作成し、登場人物のパーソナリティを読者にイメージさせる表現を使用している様子を報告する。

5. 「大学初年次文章表現クラスにおけるアクティブ・ラーニングの実践報告」

吉田美登利（東京工業大学）

発表者は、大学初年次の文章表現クラスにおいてアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）を目指した授業を行っている。そのために、グループディスカッション、ピアレスポンス、グループ代表作文を選びクラスでシェアする、などの多様な活動を取り入れている。それぞれの活動の効果を学習者の振り返りから探るために、リアクションペーパー「大福帳」の記述を分析する。記述は、先行研究の基準に沿い質的なカテゴリーに分け検討した。「大福帳」のコメントが、シラバスで目標とされる各項目にどう対応しているか検討し、授業の効果と、改善すべき点について明らかにする。

6. 「TAE による授業改善の試み」

小山貴之（創価大学総合学習支援センター）

本発表では、質的研究法 TAE を用いた筆者の授業改善の試みを報告する。具体的には、2016 年前期における文章表現法科目（日本人学生クラス）の実践を TAE によって分析し、自分らしい授業とは何かを考察する。そしてその結果が、2016 年後期の授業にどのような影響を与えたかを調べるため、シラバス作成や授業準備、授業中の学生対応、授業後などのさまざまな視点から振り返る。以上の手順によって、TAE での振り返りがどのように授業改善にむすびついたかを検証し、その有効性と効果を探る。

7. 「アカデミック・ジャパニーズ実践におけるパフォーマンス評価の動向」

木下謙朗（龍谷大学）

近年、アカデミック・ジャパニーズの実践において、口頭発表やレポートなどのパフォーマンスについて、ルーブリック等の判断基準を使用し評価する教育機関が増加している。特に 2012 年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012 中央教育審議会）が発表されてから、大学全体で評価基準を構築する教育機関も出てきている。本発表では、近年の大まかなパフォーマンス評価についての動向について報告する。